
迷信は爆発だ！

HEERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷信は爆発だ！

【Nコード】

N3150V

【作者名】

HERO

【あらすじ】

迷信に振り回され、俺の人生は狂ってしまった！！
もう自棄だ！！

(前書き)

> i 2 8 2 8 9 | 2 1 0 <

幼い頃、いつも近所の爺さんが俺に色々なことを教えてくれた。

大人になり、教えてもらったことが全て迷信だと気付いた。

俺は今、その爺さんの前に立っている。爆弾のスイッチを握って。

「この親指に少しでも力が加われば、俺の体に取り付けている爆弾が発動し、ここら一帯にクレーターを作る…。覚悟はいいか、爺さん？」

「ま、待つんじゃない！ 何故こんなことをする、タクロー！！」

「何故…だと？ あんたが俺に吹き込んだ迷信の数々、忘れたとは言わせんぞ！！」

そう、俺はこの爺さんが話した迷信に踊らされ、人生を狂わされたのだ。

「まず、『風邪は人に感染すると治る』って迷信！ あれを真に受けた四歳の俺は、四十度の高熱を人に感染するためフラフラになりながら街を徘徊した！ その結果どうなったと思う！？」

「どうなったんじゃない？」

「道路の真ん中でブツ倒れちまったんだよ！！ 俺の鼻が潰れてるのはそのせいだ！！」

「そうだったのか!!」

「次は『雛祭りが過ぎた後も雛壇を出し続けると晩婚になる』って迷信! あれを真に受けた六歳の俺は、妹が晩婚になることを恐れ、雛人形は出さない方がいいと妹を説得したんだ!! 最初から出さないのが一番安全だからな!!」

「賢いのう!!」

「だがそれが悲劇を生んだんだ!! 三年間ずっと押し入れにしまってたあつた雛人形に霊が宿り、閉じ込められていた怨みをはらすために妹を殺したんだよ!!」

「なんとということじゃ!!」

「そして『夜爪を切つてはいけない』っつー迷信!! 九歳の俺は長くなつてしまった爪を切るために爪切りを手を取った! だが時間帯が夜だということに気付き、切らずに寝たんだ!!」

「それでどうなった!？」

「寝ている時、俺に悪魔が取り憑いた! 悪魔に取り憑かれた俺は長く伸びきった爪でガリガリと自分の顔を掻いちまつたんだよ!! あの夜ちゃんと爪を切つてれば、俺の顔にこんな傷が残ることはなかった!!」

「なんともまあ!!」

「さらに、『白い蛇は縁起がいい』という迷信!! 十三歳、スネークハンターを目指して修行に励んでいた俺の目の前に白い大蛇が

現れた！！ 大蛇は俺の父親を狙っていたんだが、白い蛇である以
上手を出すことができん！！」

「で、では……！」

「ああ、俺は父親を失った！！ そしてスネークハンターになる夢
を捨てたんだ！！」

「そんなことが……！！」

「それから『スイカの種を飲み込むと盲腸になる』とかいう迷信！
！ 十四歳の俺はクラスの奴らから毎日金を取られていた！ 当然
すぐに金は底をつき、俺はすぎるような想いで優勝賞金五十万の『
スイカの大食い大会』に参加したんだ！！」

「ほほう……！」

「だが俺は勝てなかった！ スイカの種を飲まないよう丁寧に食べ
ていたのが敗因だ！！ 金が用意できなかった俺はクラスの奴らか
らボコボコにされ、このとおり前歯の無い顔にされてしまった！！」

「ほ、本当じゃ！ 前歯が無い！！ ワシと同じじゃ……！」

「そんで次は『朝の蜘蛛は縁起がいい』って迷信！！ 中学でのイ
ジメが原因で登校拒否となった俺は、高校進学を断念し、十六歳か
ら妖怪の退治屋をし始めた！！ だがある日、土蜘蛛という妖怪が
早朝に現れ、俺の母親を食らおうとするという最悪の事態に陥って
しまう……！！」

「それはまずい！ 早く助けねば……！」

「いや、迷信を信じきっていた俺に『朝の蜘蛛』に手を出すなんてことはできなかった！！ 結局、俺は母親が土蜘蛛に食われるのを黙って見てることしかできなかったんだ！！ そしてそれがきっかけとなり、俺の妖怪退治業は終了した！！」

「悲惨過ぎる！！」

「最後は『しゃっくりが百回出ると死ぬ』とかいう迷信だ！ 十八歳のある日、俺はしゃっくりが止まらなくて焦りまくっていた！！」

「で、どうしたのじゃ！？」

「どうせ死ぬのなら、と、俺は一か八か全力で呼吸を止め、自身を心肺停止にまで追い込んだ！！ その結果しゃっくりは止まったが、脳に後遺症が残り感情のコントロールがド下手になった！！」

「な、なんと！ では、今のお前が取っている行動もその後遺症のせいなのか！！」

「そういうことだ！！ もう俺に抑制なんてもんはありやしねえ！！
！そして…失うものもな！！」

「タクロー……」

爺さんはシワだらけの顔に悲しそうな表情を浮かべた。
その歳まで生きても、やはり死というものは恐いか。

…いや、違う。

あれは憐れみだ。俺に対する憐れみの表情だ。

何故だ、何故こんな状況で…。自分が死ぬかもしれないって時に…。

「どういっつもりだ!!」

俺が声を荒げて尋ねると、爺さんは静かに口を開いた。

「迷信が生まれるのにはそれなりの理由があつてのう、たいていは戒めや生活の知恵が元なんじゃよ。ワシはただ、タクローにいい人生を送ってもらいたかっただけだったんじゃ。それがまさかお前を苦しめることになるとはのう…。本当に悪いことをしたと思つとる」

「や、やめろ、もう喋るな!! 俺の決意を…削ぐんじゃねえよ…」

全身から力が抜け、俺は膝をついた。

「タクローよ、たくさん辛い想いをしたのう。じゃが、死ぬのは『迷信に振り回されない人生』を体験してからでも遅くないんじやないかの?」

「爺さん…。分かったよ、俺、もう少し生きてみるよ…」

その時だった。

すぐそこの道路を、霊柩車が通った。

「あ、霊柩車! 親指隠さねえと!」

俺は反射的に親指を拳の中にしまおうとした。

だがそれはできなかった。

何故なら、拳の中には爆弾のスイッチが握られていたから。

「あ、押しちゃった」

「ん？ 何を押したんじゃない？」

「爆弾のスイッチ」

「ああ、爆弾のスイッチか……………って、タクロオオオオオオオオオオ！
！！」

激しい閃光が辺りを包み込む。

薄れゆく意識の中、俺の頭に新たな迷信が降りてきた。

『迷信に踊らされる者、爆死する』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3150v/>

迷信は爆発だ！

2011年10月3日19時54分発行